

賢婦人との出会い

全国歴史研究会福島白河大会の出会いから

川瀬泰子氏と田中康子氏のこと

川瀬泰子氏にお会いしたのは、大会（3日間）初日の式典会場で着席した直後に、我々が岡山観光コンベンションの揃いの法被（はっぴ）を着用していたのに、気づいた初老の地元（福島）の婦人が話しかけてこられた。彼女によると「先祖の一族のうち一部が美作国に移り住んでいた故事があり、岡山の方が懐かしく声をかけました」と丁寧な対応であった。

その後の何度かのお手紙に接していると、古稀を迎えた私よりも一回り先輩で終戦前後すでに女学生であったようである。彼女の書作を拝見すれば旧制高等女学校在学中に学徒動員先の保土ヶ谷の工場（化学工場）で空爆に遭遇し、同級生14名が無残な形で、目の前で爆死し、生き残った安堵と同時に彼女等に申し訳ない気持ちを抱きつつ、今も14名の名前を胸に刻みながら「生かしていただいている」とのことである。その心情を察するとこちらにも感情の高揚を抑え切れない。

私は終戦時3歳で戦後の苦しい生活は脳裏に残っているが、先の大戦中銃後の守りの形で学業を犠牲にした悲惨な戦争体験は、我々の戦後体験の比ではない。長年連れ添っていた主人の遺品の中に書き溜めていた原稿が出てきたので、主人の供養にと『歌舞伎と白河』と題する川瀬栄一著作の遺稿集を彼女が発刊され、自分も『郡山大空襲・白河高女生十四名の犠牲』なる短編を載せている。掲載された写真には、15歳のあどけなさが残る少女たちが、凜（りん）として映っている。モンペ姿が往時を偲ばせる。

私が主宰するエコちゃん（生ごみコンポストの一種）仲間では田中康之氏の奥さんと、先ほど紹介した川瀬泰子氏と同年輩の田中康子氏が『吾は語り継ぐ』鎮魂の証言集の中で、同じような体験をなさっている。田中婦人は当時（岡山大空襲＝昭和20年6月26日未明）岡山医大付属厚生女学部（看護）在学中で、そのまま被害者の救護に翻弄されつつ、生死を彷徨（さまよう）患者と共にした一週間の出来事を証言され、読者の感動を呼び地元新聞にも掲載された。実家（現在の美咲町）で音信不通の娘を案じる「母に再会した様子」を語るときには彼女の臉は赤く染まっていた。さもあらんと私も思う。

奇しくも田中康子氏や川瀬泰子氏が、戦火の波に遭遇された体験が私の耳に入り、戦後67年の昨今、政治は混迷し過激的で回顧的な保守主義が台頭していることが気がかりである。特に領土問題は悩ましい。隣家との境界の揉め事も国レベルになると戦争に発展する。隣国との共存はその部分を共に利用する広義の寛大さとプラス思考が求められる。長く利用していない離島を問題視するよりは、関係国で新しい使い道を模索することが、肝要と私は思う。今回取り上げた初老の彼女たちの苦しみを、再び国民が背負うことの無いためにも、真摯にこれらの証言を心に留めたい。

2012.24.11.28 山崎泰二

追記 康子・泰子・康之そして私泰二（やすじ）是も偶然の一つでしょうか。戦前戦中の異様な社会の中でわが子にこの名前を選んだ、今は亡き寡黙な親たちの願いをこの名前から察したい。